

カナダをめぐる最近のソバ事情① ～カナダのソバ生産と対日輸出動向～

江戸ソバリエ 小島末夫

はじめに ～ 初めてのカナダ行

2019年11月末から12月初めにかけて1週間ほど、カナダ西海岸にあるバンクーバー（ブリティッシュ・コロンビア<BC>州）へ行ってきました。冒頭から私事で恐縮ですが、今回のカナダ初訪問の主たる目的は、実に45年ぶりに香港大学の恩師と再会を果たすことでした。

カナダのバンクーバーといえば、かつて1970年代の半ば頃、丁度私が香港に留学していた時のことですが、香港の将来に逸早く見切りをつけて同地へ移住する香港の人達が後を絶たないような状況にありました。このため、当時はバンクーバーの名前をもじって「ホンクーバー」と揶揄されるほどだったのです。

こうしてともかく、カナダの地を初めて踏むことと相成りました。折角、このような機会を得たものですから、ここでは少しなりと皆様のご参考に供すべく、以前は世界のソバ主産地でもあったカナダにおける最近のソバ事情につきご紹介したいと思います。とはいえ、もとより浅学の身にて、しかも中国の成語（慣用熟語）にある「走馬看花」（大雑把に一部分を見るだけの意。垣間見るとほぼ同義）の感は免れないところから、どうか其の儀はご寛恕願いたく存じます。

カナダのソバ生産と対日輸出動向について

1) 世界のソバ生産と貿易概況

まず世界各国のソバ生産量と国別順位を把握するため、世界のソバ生産量国別比較統計・ベスト10 ランキングを別表のように取りまとめてみました。

表 国別ソバ生産・貿易状況（2017年）

順位	国名	収穫面積 (千ha)	単収 (kg/ha)	生産量 (千t, %)		輸出量 (千t)	輸入量 (千t)
1	ロシア	1,498	1,018	1,524	39.8	48.0	0.1
2	中国	1,684	860	1,447	37.8	27.9	0.1
3	ウクライナ	185	974	180	4.7	0.5	15.9
4	フランス	35	3,655	127	3.3	1.1	8.8
5	カザフスタン	141	851	120	3.1	3.5	2.5
6	ポーランド	78	1,450	113	3.0	11.8	12.1
7	アメリカ	73	1,048	76	2.0	24.5	7.3
8	ブラジル	49	1,321	65	1.7	2.5	-
9	リトアニア	48	1,097	53	1.4	16.0	16.9
10	日本	63	547	34	0.9	0.03	52.1
23	カナダ	0.4	1,038	0.5	0.0	5.8	2.5
	世界計	3,941	971	3,828	100.0	167.7	199.3

出典：FAOSTAT

これは、国際連合食糧農業機関（Food and Agriculture Organization：FAO。1945年に設立され、本部はイタリア・ローマ。日本は1951年に加盟）に基づく全世界のソバ生産高の現状を表したものです。FAOは、世界中の包括的な食料・農林水産業に関するオンライン統計データベースであるFAOSTATを提供しています。

このFAOSTATによると、直近でデータ入手が可能な2017年には、世界で32カ国（但し、データ無しの国あり）がソバ生産国として一応リストアップされ掲載されています。これから明らかなように、同生産量が集計されているのは、現在の国連加盟193カ国のうち概ね6分の1相当の約30カ国を数えるに過ぎません。その中で生産量が最も多いロシアとそれに拮抗している中国の2カ国で、世界総生産量383万トン（ちなみに、過去5年間の平均値では279万トン）のうち8割近い77.6%も占めていることが読み取れます。また収穫面積に関しても同様に、両国で世界全体の8割以上を占めています。

大陸（地域）別に見てみると、世界全体の半分以上を生産しているヨーロッパ大陸では、ロシア、ウクライナ、ポーランドなどの主要生産国を擁する東欧地域が最多で48.1%に上っています。次いでアジア大陸のうち中国、日本などを含む東アジア地域が38.8%と続き、この両地域だけで世界総生産量の9割近い86.9%を産出しています。さらに北米大陸では、アメリカとカナダ2カ国のウエイトが相対的に低下してきており、両国の実績を足し合わせても2%程度のシェアだけです。なお、南半球においてはブラジル、南アフリカの2カ国がFAO統計に出てくるのみであり、両国の合計生産量を見てもわずか2%にも満たない割合です。つまり、世界ソバ生産の観点からすると、地域的にはほとんど北半球だけに偏在していることとなります。ただ、同統計には生産国として数値が出てきていないものの、皆様もご存じのとおり、大洋州地域のオーストラリア（タスマニア産など）やニュージーランドでも実際にはソバが栽培されており、

一方、ソバの輸出量については世界全体で16.8万トンに達しているのですが、これは生産量の4.3%を占めるに過ぎません。この値は、同様に計算した小麦の25.5%、トウモロコシの14.2%と比較してもかなり低い割合で、米の5.7%よりも更に低いことが分かります。国別では、ロシア、中国、アメリカが主要な輸出国として挙げられ、これら3カ国で全輸出量の約6割を担っています。しかし、生産量に占める輸出量の割合から見ると、世界最大のソバ生産地ロシアや第2位の中国では、同割合がそれぞれ3.1%、1.9%に止まっているのに対し、アメリカの方は対照的に32.2%と3分の1近い高水準を占めているのです。ここからソバの栽培目的が、前者の場合は主に自国消費に力点が置かれている半面、後者においては貿易重視であることがうかがわれます。また輸入に関して特筆される点は、日本1カ国のみで年間5万トン余りが輸入され、世界総輸入量の4分の1以上（26.6%）を記録していることです。その他では、リトアニア、ウクライナ、ポーランドなどの東欧諸国が、各国とも年間1万トン以上を輸入しており、全輸入量の6~9%に上っていることが目立っています。

2) 世界におけるカナダ・ソバ生産の位置付け

それでは次に、本題であるカナダのソバ生産の状況と世界での位置付けについて見ていくことにします。

① カナダのソバ生産と世界に占める割合

カナダと聞いて皆様はどんなイメージをお持ちでしょうか？ 同国はアメリカと同様、移民の国として知られ、世界からの民族が集まって構成される「モザイク国家」とも呼ばれています。あるいは、あの白地に赤白赤の縦縞で中央に大きな赤いサトウカエデの葉が配されたメイプル・リーフ国旗を思い浮かべられる方も多いかもしれません。実は、カナダは日本の約27倍もの広大な国土を抱え、そこに日本の4分の1くらいの人口しか住んでいない土地柄であり、大自然の育む天然資源など非常に恵まれた国なのです。

肝心のソバに関しても先ほど触れたように、世界的にも確かに主要な生産国の一つでありました。つまり、カナダはソバの

	平均生産量 (単位：t)	平均単収 (単位：kg/ha)
1960年代	30,829	1,063
1970年代	36,873	895
1980年代	31,740	899
1990年代	15,475	1,020
2000年代	5,650	—
2010年代	205	—
(~2017年)		

栽培が大変盛んな国であったわけです。以下では、今日までのカナダにおけるソバ生産量の暦年推移を長期間にわたって時系列的に辿りながらご説明したいと思います。

具体的には前で述べた FAOSTAT により、まずカナダのソバ生産高を 1960 年代まで遡って追いかけてつ、その後の状況変化について捉えてみます。その辺の事情を理解する一助として、参考までに 10 年間の平均値を年代別に列挙していくと次のようになります。

ここから明らかな点は、1970 年代をピークにカナダのソバ生産量が大幅な落ち込みを余儀なくされてきたという事実です。ちなみに、過去最高の生産高を達成したのは 1978 年 (7 万 2,700 トン) のことであり、次いで生産量の上から順に 1970 年の 6 万 1,941 トン、1971 年の 5 万 4,974 トンと続き、従来の生産高ベスト 3 がいずれも 1970 年代あたりに集中して記録されていたことが判明します。

このようにカナダでは、中でも 1990 年代の頃からソバ生産が一貫して減少に転じ始め、2000 年代に入るや急減する傾向が特に目立っています。各年別にそのあたりをもう少し詳細に辿ってみると、とりわけ 2000 年代後半における 2008 年～11 年及び 2015 年の 5 年間に就いて言えば、何と年間生産高がゼロ (単位未満でほぼ皆無) と記載されており、カナダのソバ生産史上、まさに未曾有の壊滅状態に陥っていたことを如実に物語っています。ただ、従前に発表された修正前の公式データによれば、2008 年の生産量 2,186 トンを始め、2009 年は 337 トン、2010 年は 193 トン、2011 年は 725 トンとそれぞれ報告されていました。そのため注意を払う必要がありますので、併せてご参照下さるよう念のためここに申し添えておきます。

この主な原因としては、大きく分けて次の二つが指摘できるのではないかと考えます。すなわち、一つは 2007 年に発生したカナダのソバ生産を揺るがすような大事件 (後述) に基づく影響によるもの、もう一つは 2010 年、2014 年とカナダを再び襲った長い大雨など、近年の異常気象の多発に見舞われたことに伴うものです。

いずれにせよ、こうしてカナダのソバ生産は過去 10 年来、世界的に恒常化している地球温暖化など気候変動の影響をより強く受ける形で、以前と比べ激減した状況にあるのは否めません。そのため、世界のソバ総生産量に占めるカナダの割合も一段と低下してきているのが実情です。例えば、今から 10 年余り前の 2007 年時点においては、世界全体のソバ生産量 238 万トンに対してカナダのそれは 4,600 トンに止まり、その割合はわずか 0.2% と世界第 16 位にまで落ち込む結果となっています (注: 2000 年段階では世界 12 位、2017 年の場合には世界 23 位)。

② カナダ・ソバの主要産地と品種

カナダでソバが最も作付けされている所はマニトバ州であり、次いでオンタリオ州、ケベック州、サスカチュワン州などが主要な生産地とされています (地図参照)。



このうちカナダ南部の真ん中に位置するマニトバ州は、同国における「ソバの故郷」と呼ばれるほどの生産の中心地であり、ここだけで全カナダのおよそ7割ものソバを生産しているのです。また同東部のケベック州やオンタリオ州がそれぞれ10%強を収穫していると言われます。

特にマニトバ州南部のアメリカとの国境領域付近では、米加双方ともにソバの産地として適地だとされ、実際にマニトバ州と接するアメリカのノースダコタ州は全米第2位のソバを産出しています。また、アメリカ国内では西海岸のワシントン州が、農家数としては比較的少ないものの、ソバの約6割を収穫する全米一の生産地になっています。

こうしたカナダ産のソバは、一般的に粒が大きく、品質が安定しているところに大きな特徴があります。それらは、元はというと、主に東欧諸国からカナダへ移民してきた人々が持ち込んだものと言われ、今日でも多くが栽培・食用化されているとのこと。

次に、カナダでのソバ品種の歴史的流れについてみると、かつては同国におけるソバの品種育成が急速に進んでおり、その品種改良研究の分野では世界のトップレベルにあるとみられてきました。事実、林久喜先生の研究論文を読むと、カナダにおけるソバ育種は当初、カナダ農務省の試験圃場で実施されており、古くは日本とも関係の深い“Tokyo”が1955年にオンタリオ州のオタワ研究所で、その後は“Tempest”が1971年に、“Mancan”が1974年に、“Manor”が1980年に、そして“AC Manisoba”が1993年にといった具合に、いずれもマニトバ州のモーデン研究所で数多くの新たなソバ品種が育成されていたのです。

これらの中で“Mancan”（マンカン）種というのは、上記のとおり1974年に新しく開発された品種であり、マニトバ（Manitoba）州のMAN、カナダ（Canada）のCANの頭文字を取って命名されたものです。この実が大きくて収穫効率も良いマンカン種が、隣国アメリカはもとより遠く中国にも持ち込まれて、一時期はそれらの国の輸出玄ソバのかなりの部分を占めるまでになっていたと言います。こうしてカナダでそもそも開発されたソバ品種が、アメリカや中国からも大量に輸出されて出回るようになった結果、日本ではソバ国内消費の3分の1以上が何らかの形でカナダの息のかかった物の時もあったと伝えられるほどです。

ところが、1990年代後半に至りカナダ農務省が予算規模の縮小と共にソバ育種事業からも撤退してしまいました。そのため、マニトバ州モーデン研究所で精力的にソバの育種に携わっていたDr. Clayton Campbell（キャンベル博士）が中心となり、カナダのContinental Grain Company Canada Ltd.（後にAgricore United）、アメリカのMinn-Dak Growers Ltd.及び日本の全国蕎麦製粉協同組合（会員数は現在52社）と加商株式会社の各社が共同出資して、新規にKade Research Ltd.（ケイド社）が1995年に立ち上げられたのです。

このソバ育種の研究会社であるケイド社では、最初5年間の事業成果として計3種類の新しい品種が次々と誕生し、それが“Koban”（1997年に育成）並びに“Koto”（1998年に育成）と“Keukett”（1998年に育成）でした。先に挙げたマンカン種より更に収量が良くて製麺適正にも優れた新種が開発されたので、それに伴い生産・輸出ともこちらの方へと徐々にウエイトが移行していったのです。例えば、数少ない単年度資料ながら2000年代初頭の2002年の例を取ると、マニトバ州での品種別収穫状況がKoto 46.4%、Mancan 24.3%、Koban 10.6%、Manisoba 8.6%などと表示されています。これを2001年の場合と比べると、Kotoは6.2ポイント、Kobanは8.3ポイントそれぞれ急上昇している半面、Mancanについては5.3ポイント下落しています。

なお、カナダ・ソバの品種特性を知るうえで重要な指標の一つである単収（単位面積当たりの収穫量）の比較に関しては、別表で示したようにカナダでは2017年に単収が1ha当たり1,038kgとなっています。この数値は、フランスの若干疑義を挟む余地のある同3,655kgに比べればかなり劣るものの、日本の同547kgよりも2倍近く多収であることが分かります。ただ、キャンベル博士が1990年代後半に実施した調査の記録によれば、上で述べた“Koban”、“Koto”、“Keukett”など新品种の単収は、いずれも同3,500kg以上であったことが報告されています。もちろん、年によって自然災害の発生状況などにもよりそれは大きく変動し異なるため、単純に相互比較することは出来ませんが、ここではあくまでご参考までに列挙しておきます。

さらに続いて、上述した優秀な多収品種のソバの生みの親として世界中に知られるキャンベル博士が、遂に今後の

ソバ栽培を大きく変えると言っても過言ではない史上初の自家受粉タイプの“KOMA”の開発に成功したのです。2005年からはいよいよ商業栽培が始まりました。この画期的な自殖性のソバ品種“KOMA”が世界で初めてリリースされたことを受け、上記KADE事業から生まれた北米産玄ソバの新品種として、商業ベースの面では日本へも輸出されていくようになったのです。その日本においては、2007年2月13日付農林水産省告示第182号によると、1978年に制定された種苗法第5条第1項の規定に基づき、ケイド社から提出されていた“KOMA”の品種登録出願（出願日は2006年10月10日）を正式に受理した旨、公表されています。

こうした中で、2007年夏にカナダのソバ事業に激震が走る大事件が起きました。それは、ケイド社への出資者の一つでもあったカナダ最大手の穀物商社Agricore Unitedが、サスカチュワン州にあるSaskatchewan Wheat Poolという名の農協によって買収されたのです。同社は、これまでマニトバ州を拠点にソバの栽培や集荷を一手に引き受けてきており、その後はViterra（バイテラ）として新たに発足したわけですが、結局はそこも程なくしてソバ事業から撤退してしまいました。そのため、ケイド社本体は2008年に解散へと追い込まれて全ての活動を停止し、ソバ研究の立役者だったキャンベル博士は別の民間企業に移られて研究を続けてはられるようです。問題なのは、彼の育種研究活動を引き継ぐような人材があまり育っていないとの話も伝え聞きます。もし現状について何か新しい情報などご存知の方がおられましたら、ぜひともお教えいただければ幸いです。

③ カナダ産ソバの対日輸出推移

カナダから日本へのソバ輸出は50年以上も昔の1965年に始まりました。とはいえ、既に見たように、カナダのソバ生産量が近年来、大幅な低下をみせているのに伴って、同国の輸出量が低下すると共に、日本向けソバ輸出も必然的に一段と減少する趨勢にあります。具体的にはこれまでのカナダのソバ生産量と輸出量及び対日輸出量（単位：トン）の推移について、再びFAOSTATを利用することで5年毎の変化を捉えてみると、以下のように整理できます。

	生産量	輸出量	対日輸出量	シェア	シェア
	(a)	(b)	(c)	(c/a,%)	(c/b,%)
1990年	30,700	13,501	11,139	36.2	82.5
1995年	21,200	8,647	4,899	23.1	56.6
2000年	13,600	9,158	4,394	32.3	47.9
2005年	4,600	4,267	1,968	42.7	46.1
2010年	0	2,341	393	-	16.7
2015年	0	3,707	261	-	7.0
2017年	463	5,819	951	2.1倍	16.3

つまり、カナダ国内で生産されたソバのうち、約6割前後が輸出に回されその多くが主として日本へ輸出されており、以前はその割合(c/a)が大体3、4割程度に上っていたことが読み取れます。また他には、主にオランダやオーストラリア等へも輸出されていたそうです。

他方、今度は視点を変えて日本の財務省貿易統計（玄ソバ：HSコード1008.10.010、関税率9%）を使うことで、日本側からのアプローチにより、カナダからソバが一体どれだけ輸入されているかについて調べてみます。

日本では戦後、1952年に初めて南アフリカからソバの輸入が開始されました。これを皮切りに、それ以降、中国からは1963年より、カナダからは上述した如く1965年より、またアメリカからは1976年より、ソバが相次いで輸入されるようになりました。近年ではロシアからの参入も目立っています。そうした外国産ソバの主要な輸入先国としては、従来はほとんどが中国・アメリカ・カナダの3カ国を数えるだけの状況が長く続きました。その比率は、概ね60：20：20の割合だったのですが、1993年頃を境に為替レートなどによる価格上昇を主因に大きな変動が起きました。そのため、同比率が2013年時点の中国産が約60%、アメリカ産が約30%、カナダ産が約10%という状態から、徐々に80：15：5の割合へと移行していったのです。これを契機に、日本のソバの国別輸入量に占めるカナダのウエイトが著しく低下していくことにつながったわけです。

こうして日本の貿易統計の中では、ソバの主要輸入国として中国とアメリカ両国の地位は変わっていないものの、2010年以降においてはカナダがそこから脱落して代わりにロシアが加わりました。今では主要参加国が、中国・アメ

リカ・ロシア・その他（カナダを含む）の括りで計上されるようになったのです。例えば、直近の 2017 年においては、中国が 46.1%、アメリカが 34.7%、ロシアが 13.5%とこれら 3 カ国で輸入全体の実に 94.3%まで占めています。また上記の貿易統計資料は玄ソバの重量ベースなのですが、2010 年以降に関しては、それまでの「玄ソバ」（ソバの実＜殻付き＞）本体の輸入に加えて、ソバの外皮を剥いた「丸抜き」も同時に統計品目として別途集計されるようになりました。つまり、それ以後は玄ソバの全輸入量としては、「ソバの実（殻付き）」と「丸抜き（玄ソバ換算）」の合計で算出されております。近年では、中国産玄ソバの輸入自体は減少傾向にありますが、これは加工品（抜き実）の形で輸入が急増しているのが主な要因です。

それでは、日本で消費される玄ソバのうち、カナダから現在どれだけ供給されているかと申しますと、日本の蕎麦業界筋の話によれば、最近では北米産としてはアメリカ物が中心で、カナダ産ソバの取り扱いはあまり行われておらず、ほとんど流通していない状況にあります。とはいえ、少量ながら 2017 年の 530 トン、2018 年の 480 トンに次いで、2019 年には 1～11 月累計でスポット的に 150 トンほどの輸入実績が見られたとのことです。

こうして全体的に見ると、皆様ご案内のように、今日では日本国内における年間のソバ消費需要は約 13、14 万トンに上っており、そのうちの約 8 割が輸入品に頼っているのです。すなわち換言すれば、日本のソバ自給率は 2 割程度（但し、大豆の 3%よりは高め）に過ぎず、国内産ソバ生産量（3～4 万トン）の約 4 倍に当たる 10 万トン以上が外国産（輸入）ソバとなっています。しかも、日本国内でのソバ消費と生産の上昇傾向がみられる中であって、海外から輸入されるソバの割合が、トレンド的には概ね 8 割の水準を維持してきていることは注目に値します。

（続）